

監修の序

本書「全ての診療科で役立つ 皮膚診療のコツ」の構想は、プライマリケア医学の若きオピニオンリーダーとして、日々総合診療の診断治療にあたっておられる、内科医の木村琢磨先生・松村真司先生から独立行政法人国立病院機構東京医療センター（以後東京医療センターと略）の皮膚科に、ぜひ実際に役に立つようなテキストをつくってみましょうというご連絡をいただいたことがそのきっかけでしたが、羊土社編集部次長の嶋田達哉氏の「このような本をつくるときには企画のときからの勢いが大事です。みんなで協力しあって、一気につくってしまうのがよろしいのです」というアドバイスのもとに、こうして実現しました。

基本のコンセプトとしては、一般の臨床医のニーズにあった、診断治療のプロセスと皮疹のアトラスとを含めた内容であって、皮膚科ドクターからのコメントを同時に掲載しようというものでした。

最初のころは、羊土社編集部の熱心な嶋田次長を交えて、東京医療センターで内科医の木村・松村両先生と皮膚科医の出来尾格先生・私の5人が集まり、その内容を検討しました。その後は、インターネット時代を反映して、編集については、主にEメールのやりとりで、内容に関する質疑応答などを進行しました。この間に、出来尾格先生・私とともに東京医療センター皮膚科を退職しましたために、後任の佐藤友隆先生が編集に加わってくださいました。

東京医療センター総合診療科の同窓である、木村・松村両先生をはじめ、北西史直・山寺慎一・川崎祝・今永光彦・齋藤雄之の諸先生、同じく皮膚科の出来尾・佐藤両先生をはじめ佐藤之恵・西本和代・大内結・鈴木亜紀子の諸先生と慶應義塾大学皮膚科学教室の同窓の村田隆幸・山本奈緒・櫻岡浩一・大塚知子・畠康樹の諸先生が、執筆を担当されています。みなさん現在第一線で毎日診療にあたられておられる先生方であり、本書のコンセプトでもある、一般の臨床医のニーズにあった内容を、各疾患ごとにそれぞれ簡潔に記載してくださっています。

本書が読者の先生方の日常診療の一助となってくれることを祈念してやみません。

2010年4月

山崎雄一郎

編集の序

一般外来で、病棟で、そして在宅で診療を行っていると、患者さんがそーっと洋服をまくりながら皮膚を見せて「先生、ちょっと診てほしいんですけど…」と言うことは珍しいことではない。そんなときに、「私は診ないよ」と言うのも見識と言えば見識であるが、そもそもいかないのがこの世の中である。「えーっと、じゃあこれで治らなければ皮膚科に行ってね」と言いながらとりあえず診療にあたることもあるし、「うーん、これはわからないなあ」と頭を悩ませることも多い。小児などの場合には、「保育園の先生に、水痘だと言われたんです」など、仮診断までついて受診してくることもある。こんな疾患がもしわからなければ、その医師の診断能力は保育園の先生以下にまで落ちてしまう。また高齢者施設などに入居中の、あるいは在宅療養中の高齢者などの場合は、受診・通院そのものが困難であり、まずは一般医が最初に頭を悩まし、どうしてもわからない場合には皮膚科の先生にお願いする、という段階を踏まえざるをえない。もちろん、最近では往診してくれる皮膚科の先生もいないわけではないが、自分たちで解決できるものであれば、自分たちで解決するほうが、皮膚科の先生の負担も減るのだろう、と考える。

もちろん、臨床は一筋縄ではいかない、ましてや疾患の早期であればあるほど診断は難しい。やはり診断能力や治療については皮膚科の先生には決してかなわない。いや、そこまで目指す必要はない。私たちがあまり無理をして皮膚科の先生を煩わせてもいけないし、何より患者さんの不利益になる。では、どうすればよいか…。本書はそのように考えている一般医と専門医の橋渡しとして役立つよう企画された。私たち一般医の無理な要望に対して、いつもご迷惑をかけている皮膚科医とが協働しながら、日常的に遭遇する頻度の高い皮膚所見に、どのようにわれわれ一般医がアプローチしていくか、そしてどのようなアプローチを皮膚科の先生は一般医に望むか、さらには当座の鑑別診断と治療に至る考え方について切り込んでいった本である。

本書を媒介に、皮膚科医と一般医の連携がさらに深まって、適切な治療がなされる患者さんが増え、そして最後は日常診療の質の向上につながることが私たち編者の一番の願いである。

2010年4月

編者を代表して

松村真司